子どもの読書の未来を考える交流会 **2023.11.19**

～子どもはどうやって 大好きな本と出会うのか～

講演 「子どもの読書を支える」 草谷桂子

皆さんこんにちは。秋の貴重な日曜日にお集まりいただきましてありがとうございます。今日は 1 時間子どもの読書を支えるということでお話させていただきます。私は大学に行って学んだわけではなく、3 人の子育てと、7 人の孫育てと、それからトモエ文庫という家庭文庫を 43 年間やっていますので、そういう活動の中から、生活体験から学んだことをお話させていただきます。その点ご承知おきいただけたらと思います。

●家庭文庫の活動あれこれ

家庭文庫、大人のための朗読会と読み聞かせボランティア、図書館の支援活動、それをちょっと具体的に簡単にご紹介させていただきます。トモエ文庫という名前で、子どもの本の貸し出しと、読み聞かせが主な活動で、誰もが居心地の良い本のある場にしたいなと考えてやってきました。絵本を読むだけではなくって、パネルシアターとか、コンサートとか、お茶と琴を楽しむ会、科学遊びなど、子どもが楽しいと思うことは、機会があったら何でもやってきました。

本からも実体験からもなるべく多様なモデルに出会って欲しいなと考えていますので、本はもちろんですけれども、例えば近所に外国の方がみえたら、その方に来ていただくとか、合唱クラブの方に歌を歌っていただいて、それでわらべうたやっていただいたりとかしています。

子どもたちに本を読んでもらうということもあります。スウェーデンの青年が来られたときに、その国の言葉で本を読んでもらって、その国のことをお話してもらいました。文庫の特徴は世代を超えているっていうことかなと思います。ですので、赤ちゃんからおじいちゃんおばあちゃんまでが来ていて、折り紙教室など、大人よりも子どもの方が飲み込みが早く教えてくれるのは子どもたちというような関係性がよくあります。

赤ちゃんを囲んで子どもたちがみんなでかわいがっているっていうこともよくあります。これはお手玉遊びを、大人も子どもも一緒になってやっているところです。おはなし会も毎回やっていますけれども、お話してくださる方も最初の頃は人がなかなかいなかったんですが、最近はいろんな方がお手伝いしてくださっています。こちらは図書館の職員の方が、文庫を覗きに来たついでに読み聞かせをやっていただきました。

うちの文庫では、来た人に私はすぐお願いしてしまうのですぐ使われてしまいますが、それを承知でみなさん喜んで手伝ってくださっていると思っています。これは高校の先生が退職してから、折り紙を教えに来ていただいたときのものです。同じものを作っても出来上がりはみんな違うっていうのがすごく面白いなと思います。

子どもたちは工作遊びが大好きです。このペープサートとか数珠繋ぎとか、折り紙とかは子どもたちが自主的に作ったものです。これは体育祭が近くの小学校であったときに、5年生を中心に、人間ピラミッドを作って遊んだんですが、自然に役割分担ができていって、大きい子が先に下にいって、

小さい１年生、軽い子どもを上に乗せていくっていうのが、自然発生的にできていくのが子どものすごいところだなと思います。 次の週のときには、上に登っていた１年生の子どもたちが、来週は僕たちがやりますって宣伝のチラシを書いてくれました。そこに、「笑わせないでください」っていう言葉と、「笑わないでください」っていう言葉が書いてあって、出演するメンバーの名前まで書いてあって、次のときには見事に成功させてくれました。

●子どもたちの成長を目の当たりに

私の文庫の売りは庭があることかなと思うんです。庭とすぐ近くに畑がありますので、そこでよく遊びました。子ともたちは文庫に入らないでそのまま庭に行く子もいます。季節を大事にし、行事を大事にしているので七夕まつりとかいろいろやってきました。これは畑の枇杷を取っているところです。こちらはダンボールで迷路遊びをしているところです。これは「おばさん紙皿ちょうだい」って言うのであげたら、知らないうちに我が家の花がご馳走になっていました。

ボールのゲームも本当に大好きで、子どもたちの年齢層がいろいろですので、布のボールからサッカーボールまで子どもたちの顔を見ながら用意したので、我が家には5つぐらいボールがあります。現在はコロナのためやってないんですが、科学遊びの会の方に、毎年、科学遊びも一つ入れていました。

子どもたちが自主的にいろんな行事を投げかけてくれることがあって、私はほぼ「いいよ」って言ってます。よほどのことがない限りやっていいと。これは ５ 年生の女の子たちが、コンサートをやらせてって言ってきて、自分たちで作詞作曲して、キーボードを持ち込んできてやってくれました。水泳の帽子をかぶったり、水中眼鏡をつけたりして本当に工夫しながらやってくれました。

いつも元気よく外で走り回っているような子どもたちが「ひらひらレースの恋の歌」とかロマンスがいっぱいあるような歌を歌ってくれてびっくりしました。そのときに、司会の子が「この歌を発表するのは初めてなので失敗するかもしれませんが、温かい目で見守ってください」って言ったんですね。そしたら聞いていた３人の小学２年生の男の子たちが「温かい目ってどういう目なの」と言って、お互いにそれぞれの温かい目をそれぞれ作って、本当に曲が終わるまでその顔で聞いてくれてました。

こうして大きい子から生き方というか遊び方とか言葉の使い方とか感情とかも学んでいくんだなと思います。小さい子は小さい子なりに見ていて、手作り紙芝居や手作り絵本もたくさんあります。

それと嬉しいことに私たちの文庫は、コロナの終わり頃から、気をつけながらだけど、出前講座をしてもいいと図書館の方からお声掛けいただきました。それから毎年、私達も楽しみだし、職員の皆さんも楽しみにしながら来てくれています。本を読んだり工作をしたりしてくださって、図書館のプロの凄さを私達は学ばせていただいているし、職員の皆さんの方も、地域でこうして個人が活動しているっていうことを見てくれて、お互いにそれぞれ信頼し合える関係性ができているのはありがたいことだなと思っています。

●読書と生活体験

絵本と生活体験を結びつけたいなといつも思って、できることはさせてもらっています。特に私の家の周りは、最初の頃は田んぼの中の一軒家だったくらいで自然に恵まれた環境です。今では家も増えて来たんですが、まだ畑も残っていて、私の家の隣にも畑がありますので、ジャガイモ掘りをしま

した。大人が鍬を振るう前に、子どもたちはみんなで １ 列に並んで、手で掘っていました。面白いなと思ったのは、掘ってしまってから、そのジャガイモが本当にまた来年芽が出るかどうか試してみると言ってまた埋めた子がいたりして、私達大人もいろいろな刺激を受けて、子どもってすごいなって思わせられます。掘りたてのジャガイモをお手伝いの方たちが茹でてくれている間に、子どもたちと一緒に絵本を読んで、読み聞かせをしました。

今は土曜日にやってるんですが、最初の頃は火曜日だったんです。そうするとお勤めしているお父さんとお母さんは来られないですから、夏休みバージョンとか春休みバージョンというのをやっていました。そういうときには、いつもはできないような積み木遊びとか、流しそうめんとか、お餅作りと、思いつくことをしてきました。その過程でお父さんとお母さんたちが自然発生的にいろんなお話をして仲良くなっていったかと思います。私がやりたいと思ったのは、本と人を繋ぎたいということです。

家庭でも学校でもない第 3 の場所として、そして子どもたちに一つでも多くの楽しい思い出を生活体験からも本からも、多様なモデルに出会って欲しいということです。当時私には中3と小 6 と小 1 の 3 人の子どもがいたんですが、当時は管理教育で管理の厳しい時代で、中学校もものすごく荒れていて、私の息子が行っていた学校も廊下を自転車で走ったりとかしているという噂が流れてきたような時代でした。

そのときに私は子育てしながらつくづく思っていたのは、自分の子どもだけ幸せにしても何の意味もないなということです。自分の子どもが幸せであるためには、隣りの子、近所の子、小学校の子ども、同じ市や同じ県の子ども、さらには日本の子ども、世界の子どもが幸せでないと、本当の意味で自分の子どもの幸せもないなと思いました。まあ、そんな大げさなものでもないんですが、自分の子どもだけかわいがっていたのでは駄目だなっていうことをすごく思っていました。

童話を書いていたのですが、綺麗事じゃなく子どもたちの生の悩みや悲しみ、喜びに本当に付き合いたい、寄り添いたいと思いながら書いてきました。文庫は学校でも家庭でもないので、子どもたちが安心して本音を話してくれるんです。いろんな顔が見れたように思います。多分親の前では見せないような顔も見せてもらったのかなと思います。ですので、私はいつも子どもたちの授業参観とか家庭訪問とか先生との面談のときには、うちの子どもも親の知らないところで悪いことをしていると思いますが・・なんて言うようになりました。自分が母親として見ている子どもの姿というのは、本当にごく一部だなっていうことを、私は文庫をやって感じていました。

子ども時代に私は近所のお姉さんに本を読んでもらうという、とても幸せな体験をしました。自分の家は忙しくて親は読んでくれなくても、よそのお姉さんに読んでもらったおかげで私は本が好きになったんです。だからその恩返しというよりも、その方の生き方を真似たいという思いが私の中にあったように思います。私が気をつけていることは、皆さんにとっても当たり前のことかなと思うんですが、自分のためというんじゃなく、子どもと親と本とが主人公で、あるがままを自然に受け入れるっていうことです。来るもの拒まず去るもの追わず、それから読んだ後に先生とか図書館とか親に繋げるようなことも意識してきました。情報収集と研鑽は仲間とともに今でも楽しくやらせていただいています。

そしていつも、家庭文庫の限界というのを知っておきたいと思っています。永遠に続く保証はないし、専門知識を勉強しているわけではありません。バランスの良い選書やレファレンスができません。自分の好きな絵本しか置いてないんです。本の数に限界があります。しかもいつでも開いているのではありません。たまにやるから子どもたちにいい顔ができます。毎日やっているわけではないので、

できることがある。ほとんど毎日、できるだけ多くの時間を空けてくれている図書館については、文庫をやっているからこそ図書館の発展に目を向けていきたいと思っていて、文庫をやると同時に 40 年余、図書館支援活動をしています。

●老人ホームで読み聞かせ

私は老人ホームで読み語りをしていました。というのは母が近くの老人ホームに入居しまして 8 年間そこにいたんですね。コロナ期を抜かして4年間ほど読み聞かせをさせてもらいました。母もそうですが軽い認知症の人たちも含めて入っていた部屋だったものですから、行くと先ずは「あんた誰？」って言われたものです。大体 40 分くらい、まずはつかみ、例えば犬のおもちゃを持って行ったり、道端に咲くタンポポを持って行ったりとか、何か入居者が興味を持ちそうなものを用意していって、ちょっとフリートークしてから絵本とか紙芝居を読んで、そして最後に季節の歌―多分おばあちゃん、おじいちゃんが知っているだろう歌をプリントアウトして歌ってきました。

そのときお年寄りの方たちも絵本を読んでいるうちにずんずん目が輝いていくのを体感したんです。本来の自分にずんずん戻っていく感じ。そして最後には「よかったやー、また来ておくれ」と言われて気持ちよく帰ってきました。でもまた行くと「あんた誰だね」。（笑い）
そういうの体験をしました。

母は 103 歳で今年の夏亡くなったんです。ですからその活動はもうやめています。コロナになってから引きこもっている老人が私の友人たちでも結構多いのに気がついて、あえて大人のための朗読会をやっています。それは月 1 回です。語りをしてくださる方がいっぱいいて、絵本読み、素話も含めていろんな作家さんの作品を読んでもらっています。
これは私が理想としていたあらゆる層の人たちの集いです。近所の農家のおじさん、おばさんから、図書館活動の仲間、文庫でお手伝いしてくださる方とか、図書館の職員の方も含めて、いろんな層の方が来てくれています。

保育園の場合はプライバシーに気を付けるという事を考えて、先ほど言ったことと記録を付けること、仲間との情報交換が大事だと思います。

子どもの本の魅力はレジュメに書いてありますので、後で読んでいただくとして、私が一つ言えるとしたら、多様なモデルに出会うことの大切さということか思います。絵本で出会ったいろいろなモデルから、実際の生活の中では体験できないような人と出会えるし、それは過去の人だけでなく未来の人とまで広がります。自分のこれからの人生の選択肢が増えていきます。そうすると、自分とは違う選択肢の人たちに対しての理解も深まっていくと思うんです。それが絵本の大きな役割かなと思っています。

どこでも誰もが良い本に出会える、というのは今日のテーマでもあると思うのですが、例えば松岡享子さんは**『子どもと本』**（岩波新書）の中で、「子どもを本好きにするのには、生活の中に本があること、大人が本を読んでやることの二つです」と言い切っているんです。「子どもを本好きにするのに、これ以外のそしてこれ以上の手立てがあるとは思いません」と。同じようなことをいろんな方がいろんな言葉で言っていて、渡辺茂男さんは、「絵本を読む楽しみは心に緑の種をまくことだ」とおっしゃっていて、「すぐに効果が目に見えるものではない、幼い心がパソコンのキーボードでふさがれたり、コンクリートで固められたりする前に自分の手で緑の種をまいてあげてください」と言ってます。

松居直さんは、「例えば文章の一節、挿絵の一部分、1冊の絵本の作り出す物語世界の雰囲気、驚き、悲しみ、喜び、おそれ、共感といった小さな種が心に残り、それが長い年月の間に様々な体験や思索を通して芽生え、形を変えて発展し成長するのです」と言っています。私自身の読書体験がまさにその通りだったと思います。

●あちら側とこちら側を結びつける

いくつか本を紹介させてもらいます。

まず、こんな小さな本ですが、住井すゑ**『夜あけ朝あけ』**。大きいハードカバーの本もあったようですが、いまは新潮文庫が出ています。小学校の 5 年生のときに、小さな狭い学校図書館で出会いました。幸いにも担任の先生が学校図書館担当の先生だったので、そのような幸運に出会ったのだと思うんです。

出だしは「やわらかにほおをなでるアブラナの甘いにおい、そっと唇にしのびよるかすかな、れんげ草のにおい」と、とても美しい文体で最初から最後まで書かれていますが、内容はとても厳しくて、終戦後の茨城の農村で両親が早く亡くなって、中学生の長男を柱に、弟と妹 2 人の貧しい 4 人兄弟がおばあちゃんと助け合って田圃を守って暮らすって話なんです。

貧乏であるがゆえに、そして親がいないがゆえに、周りの冷たい差別にも会いますが、この家族は人を恨んだりする暇もないほど忙しく働いていて助け合って暮らしていきます。私が本を読んで初めて泣いたというのがこの本なんです。その泣いた場面というのが、子どもたちや家族の苦労している場面ではなくて、そういう家族に、その村に住む芸術家一家、豊かな生活をしている一家が寄り添ってくれるところなんです。そういう人たちとの関わりによって、この家族が救われていく。

貧乏とは対極にある人たちが優しい言葉をかけているという場面にすごく感動して泣いたんです。どんな過酷な生活であっても、人は前を向いて堂々と歩けるということ、それには、芸術や文学、豊かな自然というのも大事ですが、支えてくれる人がいる環境が大事なんだな、と子ども心に思いました。

豊かさのあちら側とこちら側に分断されない社会観というのを子ども心に感じたんじゃないかなと思うんです。いい本というのはあらゆる意味で、あちら側とこちら側に橋を架けてくれるものだなと思うんです。橋を架けると同時に、その間にある壁を取り除くという意味もあるかと思います。ある時、静岡新聞から「あなたの 1 冊は何ですか」と取材された時、私は迷わずこの一冊をあげました。私が生活しているときとか、書くときにいつも原点になっているのはこの本だなって思うんです。

あちら側とこちら側というのは、例えば宗教の違いとか、生活環境の違いとか、国の違いとか、いろいろあります。ともすればそれが分断されちゃうことが多いですが、その関係性をあちら側とこちら側で結びつけるものが文学ではないかなと私はずっと思っていて、私が 5 年生のときにこの物語に出会ったことで私の一生の考え方の基礎を作ってもらったような気がしています。

●絵本から言葉と感情を獲得する

私の文庫体験ですが**『てぶくろ』**というウクライナの本、皆さんもご存知だと思います。それについての話です。息子さんが反抗期で全然お話してくれなくて悩んでいるお母さんがいたんです。あるとき、流れ星がいっぱい見れるという日に、家族で近くの小高い丘に登って流れ星を見たんだそうです。そのとき渋々ついてきた息子が寝袋にくるまってみんなで転がって空を見てるとき、ポツンと「てぶく

ろみたいだな」って言ったんだそうです。そのときにその人は「これなら大丈夫」と思ったとお話してくれました。

本当にその後は大丈夫でした。子どもにはそういう親に反抗する時期もありますけれども、子どものときにそういう幸せな読書体験があると、何かのきっかけで素の自分に戻れるということを感じました。

『のせてのせて』というのは「松谷みよ子　赤ちゃんの本」ですけれども、いろんな動物が赤い車に「のせて　のせて」とやってきて、トンネルに入ると、「トンネル　トンネル　トンネル　トンネル」「まっくら　まっくら　まっくら　まっくら」「でた！おひさまだ！」って言う言葉があるのですが、私の子どもたち 3 人が実家に行くときとか、どこかにドライブするときには、もうトンネルが来ると嬉しくて嬉しくて声を合わせてみんなで、「トンネル　トンネル　トンネル　トンネル…」まだ出ないとまたもう 1 回「トンネル　トンネル　トンネル　トンネル」「まっくら　まっくら」と言って、「でたー！」を一緒に言う瞬間がものすごく楽しくて。家族の言葉の遊びの中にも入ってきていました。

『わすれものの森』は、私の文庫で、小学校のときに繰り返し繰り返し借りていた子がいて、その子が大きくなって受験生のころ、受験生活にくたびれたときに「おばさん、この本ある」って聞いてくれました。疲れた時にふっと読みたくなった本だっていうことで。大好きな本があることで、受験生の暗い時代にもちょっと息抜きになってくれたかなと思います。

『税金で買った本』というのは漫画ですけれども、私が最近ハマっていて、8 巻ぐらいまで出ていると思いますが「図書館のあるある辞典」みたいな感じで、ある子どもが親が離婚してから本を読むことをやめてしまい、自由になれると思い賢いグループからやんちゃなグループにいって、一旦つっぱりになる。ところがそこは上下関係があって、先輩の彼女に声掛けて殴られたとか、自由も何にもない。結局、自分が昔読んだ本が懐かしくなって、図書館に来てバイトをして、図書館職員にかわいがられながら自由を取り戻していくっていうことを面白おかしく書いてある本なんです。そこでもやはり小さいときの思い出が、何かで迷ったときに戻してくれるという役割をしています。

そういうようにいろんな本が人間の一生を助けてくれていると思うことがすごくたくさんあります。私の体験をもう少しお話させてもらいます。絵本を読むとどんなことがあるかというと私は言葉を獲得していくということがあると思いました。この**『あかいりんご』**という本、ご存じでしょうか。

こんな小さい本ですけれど、スズメが赤いリンゴを見つけて食べようと思うと、次から次へと動物がやって来て、それがだんだん大きい動物になって取られてしまうというお話です。繰り返しの面白さもあります。最後にリンゴはどうなるかということですが、私は調布に住んでいる長女が子育て中に、2 人目の子どもが生まれた時にこの本を持っていきました。その子は 2 歳ちょっとぐらいだったんですが、できるだけ母乳を続けていたので弟が産まれるってことは、お母さんのおっぱいを取られたっていう時です。 そういう時、この本を読んであげました。

その後、私とお風呂に入ったときに、おっぱいを探してきてなめてみて、すごくかわいい声で「ごちょうちゃまでした」と言ったのです。次の日にも言ってくれるかなと思って、なめたところまではいっしょだったんですがなんと言ったかというと「うわ、まずい、ぺっぺっ。こんなまずいおっぱいはごめんだ」と言ってお風呂から出ていきました。あれ、どこかで聞いたようなセリフだなと思ったらこの本の中に出てくるんですよ。リンゴを最後に熊さんが取ってしまうのですが「こんなまずいリンゴはごめんだ」って言って行ってしまう。美味しくない理由は虫食いだったってことで、最後はいちばん最初に欲しがった

スズメのものになるという話です。この体験はわたしも孫にも家族にもずっと話題にしてきて、ちょっと反抗的な態度をとるとよくこの話をしたりしたものです。

その孫は、小さいときの私とのこの関わりがあるので、何となく大丈夫だという感じがするんです。あの「てぶくろ」のお母さんと同じで。すぐに効果はないんだけれども、大きくなってからあのときに読んでもらったその時間を思い出してくれるんじゃないかな、と。

言葉を獲得するということは感情を獲得することでもあるのかなと思うんです。本によって言葉を獲得すると同時に、感情も獲得していくと思います。同じような意味で**『がちゃがちゃ どんどん』と**いう、ビジュアル系でオノマトペがいっぱいついている本があります。いろんな音がいっぱい出てくるのですが、この中の「カーン」というのは、今大学 4 年生の内孫の女の子がいちばん最初に言った言葉でした。「パパ」でも「ママ」でもなく「カーン」でした。そのように、絵本で言葉を覚えていくとか、感情を確認していくような体験が子どもにとってすごく大事だなと思います。なんかすぐに形になってというのではなくて、モヤモヤとしたものとか、温かいものとか、開放されていくものが心の中に、身体の中に宿っていくというのが本を読むということじゃないかと思います。これを読んだのは私の息子で、父親がよく読んでいたんですね。孫の中にはこの場面が一番印象に残っていて、その場面についていた「カーン」という言葉が自分の最初の言葉になっていたのです。

● 本を読んで成長する子どもたち

『おふろだいすき』という本もご存じの方が多いと思うんですが、これは私が文庫をやってよかったと思わせてくれた本です。私の文庫にすごいいたずら坊主が来てました。今のいたずら坊主とは違い 40 年前は本当にいたずら坊主で、本っていうのは人の頭を叩く道具、あるいは踏み台なんです。本をぱっぱと出して来て踏み台を作って、その上に乗って何か一生懸命探している。何の本を探してるのかと思ったら「はだか、はだか」と言って裸の本を探していました。

子どもたちは自分の関心のある物から絵本に入っていくこと多いんです。子どもの関心のあるものというと、動物、食べ物、乗り物が 3 要素とよく言われていますが、この子の場合は、裸なんですよ。この子が裸が大好きってことはわかったんですが、本は嫌いなんです。お話しても本を読んでも全然乗ってこない。

その子にこの本を見せて「はだかだ」って大きな声でわざと言ってみた。そしたら最初はちらっ、ちらっと見ていたのが、読み進める内に、だんだん関心が出てきたんですね。そのときに私は「子どもが本になる」瞬間というのがあるような気がしたんです。その瞬間に目がキラキラし始めて、確実に本の中に入り込んでいるという顔をしたものですから、私は文庫のおばさん冥利に尽きるなと思いました。

この絵本は、元気に遊んでいる男の子がお風呂の中でいろいろなファンタジーを体験します。お風呂の中で楽しく動物たちとごっこ遊びをして、そしてお風呂から出ていく。ただ単純にそれだけの話なんですが、絵を見る楽しさから言うと、風呂に入るときの髪型と、濡れそぼっていく髪型と、最後にタオルでふいたときの髪型が違っているとか、そういう楽しさもあるのですが、そういうことに気がつくのが子どもです。

大人は字を読んで、子どもは絵を読むんです。だから絵はすごく大事です。その子はそれからそれをきっかけにこの本は自分の本だと思って、「おばさんあの本ある？」が合言葉で繰り返し繰り返し借りてってくれたんです。だから好きな本があるというのは、1 冊でいいので、すごく大事かなと思い

ます。

そのうちこの子はいつの間にか本で頭を叩いたりしなくなって、何となく本を読んでいるようになりました。次の年にその子に負けないいたずら坊主が入ってきたんです。そしたら自分が本を読んでいるときに「やかましい、邪魔だ」、「おばさんあの子何とかしてくれ」って言って来たものですから、子どもの成長って楽しいなと思いました。

この子は今は 50 歳くらいですが、20 いくつかの専門学生のときでした。たまたまその子のお母さんにスーパーで会って「よしひろくん元気？」って聞いたら、「今、私のアッシーをしてくれて駐車場にいるから」というので会いに行ったんです。そしたら眼鏡をかけて、小さな字の文庫本を読んでいました。やった！と思いましたね。

『わたし』っていう本も、皆さんご存じの方が多いと思うんですが、谷川俊太郎さんの本で、これはわたしから見ていろんな人が出てくる。例えばお父さんから、お母さんから見ると、私は娘のみち子、赤ちゃんから見るとお姉ちゃん、お兄ちゃんから見ると妹と言うように「わたし」との「関係性」で話が発展していきます。自分を取り巻く人間関係を書いていて、私は子どもたちと一緒にパネルシアターを作りました。私を中心にいろんな人が自分の身の回りにはいて、例えばね、私と学校の先生との関係が悪いときでも、その他にこんなにいろいろな関係性があれば、どこかで自分は生き延びられるということを私は感じていました。

ともすれば、学校で何か嫌なことがあれば学校のことしか頭に入らなくなって自分は情けないとか駄目だとか世の中を恨んだりとかすることが多いですが、そうじゃなくて、そこの関係はダメでも他にこんなにいっぱい良い関係があるじゃないか、ということを教えてくれるのかなと思っていたんです。

私は定時制の高校生に講演をやらせてもらったことがあります。そのとき私が言ったのは、自分を取りまく人たちとのいろんな関係性があって、自分の知らないところで見守ってくれている、というような話をしたんですが、終わった後に 1 人の男の子が来てくださって、「僕は周りの中に自分がいる」と思ったと言ったんですよ。その子は進学校に行っていたんだけど合わなくって、定時制の方に来て将来、福祉の方で働きたいと言ってくれました。私には自分を取り囲む人の視点しかなかったんですが、その学生さんは、自分がその取り巻く方の立場で絵本を見ているんだなと思って感心しました。

『アリからみると』という本ですが、ギャングエイジの3、4年生の男の子たちがいっぱい来ていた時に、たまたま赤ちゃんがやって来たんです。そしたら男の子たちがかわいがるつもりで、大きい図体の子たちが一斉に赤ちゃんに向かって「ばあ」って言ったんです。そしたら赤ちゃんはびっくりして泣いちゃったんです。「せっかくかわいがってあげるつもりだったのに赤ちゃんに泣かれちゃったね」と言ってこの本を読みました。

蟻から見ると、みんな大きく見える、いろんな虫が出てきて大きく見えるんです。そうしたら、子どもたちがその後は、何となくニヤニヤしながら、赤ちゃんを驚かせないようにかわいがってくれていました。

●本から時代を読み取る

私が自分的に楽しんでいるのが、絵本から時代を感じることです。今はどういう時代なのか、あるいは 100 年前はどういう時代だったのか絵本で見ることができるんです。絵本は、時代の証人でもあるんです。例えば、同じ松岡達英さんの作品でも、**『くさはらどん』**では、男の子しかタモを持ってな

いんです。その４年後の**『いけのおと』**のときには、女の子にもタモを持たせてくれてるんです。そういう違いがある。

『モチモチの木』、教科書にもありますね。ある時、子どもたちが教科書にもあるからと言って読んでくれたんです。そしたら、途中で読むのをやめて「あれ、これ教科書と違う」といいました。「おなごみたいに」という言葉が教科書にはないそうです。これはつまり、男女共同参画というか、「おなごみたい」という言葉の縛りから、教科書の中では解放してくれているということですね。

ご存知の**『しろくまちゃんのほっとけーき』**でも、最初の頃は、「あわのホットケーキだよ」で終わっていますけれども、現在は「いっぱいたべたね　おいしかったね」で終わっています。なぜこのように変わったのか。時代の変化を考えて、これは私もそうじゃないかなと思い、実際そうらしいんですが、泡で洗うのは環境によろしくないということで、泡のない洗い方になったそうです。

そのように「たかが絵本されど絵本」で注意してみるといろいろな変化が見られ、時代が見えて面白いと思います。

私は科学の絵本も大好きで、でも私の科学の知識はゼロなのでいろいろわからないことがあれば、子どもの本で学んでいます。**『木の実とともだち』**はたまたま木の実を持ってきた文庫の子どもに「この実はなに？」と聞かれて一緒に名前を調べました。

皆さんも大好きだと思いますけれども、昔話は読み手にとっては最後の砦だと思っています。読み聞かせの初心者は、昔話を読めばほぼ間違いなく子どもたちが聞いてくれます。なぜかと言うと、長い年月を経て、いらない言葉はみんな削り取って、エッセンスだけが最後に残っていますので、子どもにすごく届きやすいと思います。ですので初めて読み聞かせを体験する方には、ロングセラーか長く読み継がれている本か、昔話だったら間違いないと思うと言っています。

●本は愛情を育てる

家族っていいなと思える本もあります。ねじめ正一さんの**『そっくりで』**という本では、足の裏はお兄ちゃんにそっくりで、クッションくしゃみはおばあちゃんそっくりで、お尻はお母さんにそっくりで、最後に、「でもあーちゃんはあーちゃんです」で終わってるんです。さっきお話した老人ホームでこの本を読んだら、大笑いしてくれて最後に、あるおばあちゃんが「あー面白かった。最後が一番良かった」って言ってくれました。そういう感想を聞けて嬉しいなと思いました。

『**おとうさん・パパ・おとうちゃん**』は、おうちではほとんど親子一緒のようなことしてますよね、でも仕事では、他の顔を持っている。学校の先生とかハ百屋さんとか。だからうちの顔と外の顔を見せてくれる本なんです。

この絵本の最後にミミズを持った子どもから逃げているこの男の人、アメリカンドリームっていうロゴが付いています。こういうのを見せてからこのお父さんの職業は何でしょうかということになるのです。子どもたちが想像してみていると、それがね、チャンピオンって呼ばれてるというオチなんです。これなんか見ると、子どもたちはミミズを怖がるようなお父さんがチャンピオン、その落差に、安心すると思うんです。

お父さんであっても怖いものは怖い。人は誰も強い人弱い人ではなくて、１　人の人間の中に強いところと弱いところがあるということを潜在意識の中で伝えてくれて、「強くなきゃ駄目」だとか、「いじめられたらいじめ返せ」なんて言うんじゃなく、強い人の中にも弱いところがあるんだと分かれば、子

どもたちはほっとするんじゃないかなと思います。

どの本もそうですが、絵本というのは愛されているということが実感できるのです。この**『いいこってどんなこ？』**という本はウサギの子どもがお母さんに聞くんです。するとおかあさんが「ないたっていいのよ、でもねバニーがないているとなんだかおかあさんまでかなしくなるわ。どんなにおばかさんでもバニーはおかあさんのたからもの。」「おこっているぼくきらいでしょ？」というと「プンプンおこっているときもニコニコわらっているときもおかあさんはバニーがだーいすき。」

私の友達で、ちょっと怒りすぎたかなっていうときには、絵本を読んであげるという人がいます。怒っているけれども本当あなたのこと大事で大好きなのよ。それは絵本を読むことで伝わっていくんですね。だから絵本を読むということは、大人の愛情を届けることでもあるんです。

大人の中には読み手の愛情もあるし、作者の愛情、絵を書いた人の愛情もあるし、それを買ってくれた図書館の愛情もあるし、出版社の愛情もあります。

さらに言えば、図書館の本を買うための税金を出している市民の愛情が入ってるとも思うんです。ですから絵本を子どもに届けるということは、大人のいっぱいの愛情を届けることだなと思っています。あちら側とこちら側に橋をかけたり、壁を取り除いたりするということは、違いを見つけて楽しむことかなと思うんです。違うから駄目じゃなくて、違いがあるからいいんだということを楽しむことの土台かなと思いますね。

●本は心の栄養

これは**『おおきいかさ』**という本ですが、この傘が大きくて顔があって、誰でも入れる優しい傘、みんなを守る傘です。傘の腕を広げることができて、雨が降ったときにずんずん大きくなることができます。みんなを入れてくれる傘というお話なんです。この、どんな場合でもみんなの居場所があるんだという中に、宗教の違う人のこともあるし、車椅子の子もいるし、人種が違う人もいるし、ここでは同性のカップルが男の子を育てています。そういういろんな違いを全部含んで大きい傘の中に入れて守っているという絵本です。これがまさに私は絵本の役割かなと思ったので、ちょっと紹介させていただきました。ここに上げた本を全部紹介することはできませんが、あちら側とこちら側に橋を架ける、あちら側とこちら側の壁を取り除くという目線で見ていただけると私がどういう観点で選んだかという事がわかっていただけると思います。

最後に手製のチラシを紹介します。これは私の文庫でチラシを作るのが好きな子どもたちが作ったものです。ここに「本を読んで夢の国に入ろう」って書いてあります。本を読むという事は子どもでも大人でもそうですが、厳しい現実の中で生きているわけで、そういう中でも本を読む時間だけは全て忘れて、自分を大事に守ったり、心を解放してくれる時間にすることができるということだと思うんです。私は、本を読むとこんないいことがあるというような理屈は一切言わないんですが、子どもたちはちゃんとわかって、こういうこと考えてるんだなと思いました。

「本は心の栄養」、まさにその通りで、病気になったらお医者さんに行って薬をもらいます、心が寂しいとき、心が弱っているときには本を読むことで心の栄養をつけていく。そういうことは子どもも感じてくれているのかなと思います。どこかで聞いた言葉かもしれませんが、自分のものになっている言葉だと思います。

それと、「トモエ文庫でなかよくしよう」これは、絵本っていうのは個人的に楽しむものではあっても、

今日もそうですが、一つの絵本をみんなで楽しむ、共有するということは、人と人と繋げてくれる役割もあると思います。

　最後に石井桃子さんの言葉を紹介します。「子どもたちよ。子ども時代をしっかりと楽しんでください。大人になってから、老人になってから、あなたを支えてくれるのは子ども時代のあなたです。」以前に世田谷の図書館で記念展があったときに手にした、石井桃子さん直筆の色紙のコピーですが、これを最後の言葉にして終わらせていただきます。

≪本講演のレジュメに載っていない本の書誌データ≫

『子どもと本』 松岡 享子著 岩波新書 2015 年

『のせてのせて』 松谷 みよ子文 東光寺 啓絵 童心社 1969 年

『がちゃがちゃ どんどん』 元永 定正作 福音館書店 1990 年

『そっくりで』 ねじめ 正一作 尾崎 真吾絵 鈴木出版 1993 年

『おとうさん・パパ・おとうちゃん』 宮西 達也 作・絵 鈴木出版 1996 年 2023 年（新装改訂版）

『いいこってどんなこ？』 ジーン・モデシット文 ロビン・スポワート絵 もき かずこ訳 冨山房 1994 年